

初等教育課程教員及び保育士養成校のピアノ実技指導における ホスピタリティの重要性について

The importance of the hospitality mind in piano actual technique guidance
in a nurture teacher education school

鈴木 佑未子(千葉敬愛短期大学)

Yumiko SUZUKI

(要旨)

初等教育課程教員及び保育士養成校におけるピアノ実技指導において極度の緊張や「どうせできない。」とい強い自己否定を示す学生がいた。

その思い込みを緩和し、保育技能としてのピアノ技術を身に着けるために担当教員自身に何が必要かを平成26年度1学年の筆者担当学生のレッスン記録を基に考察する。

(キーワード)

ピアノ実技、音楽教育、ホスピタリティ

1、はじめに

筆者が今までに出会った学生の中には、集団の時には挨拶もでき、表情も豊かで必要以上に饒舌であるのだが、一人で相対した時などは、無表情になり、返答も挨拶もできなくなることがあった。

筆者担当のピアノの個人レッスンにおいては、極度の緊張から、レッスンの始まる前に泣く(涙が出る)、顔色が悪くなる、手が震える、筆者の言っていることが聞こえているだろうかと思うくらいに壁を作る等の姿、態度が見られた。

その状態から、練習をしてきているであろうその成果を聞くことができず、非常に残念であった。

特に、初等教育課程教員及び保育士養成校(以

下養成校)である本校のカリキュラム「器楽Ⅰ」及び「Ⅱ」の「ピアノ実技レッスン(弾き歌い含む)」は、彼らにとって、授業に向かうための準備方法、形態において、全く初めての経験であることが多いため、その傾向が顕著であると推測された。

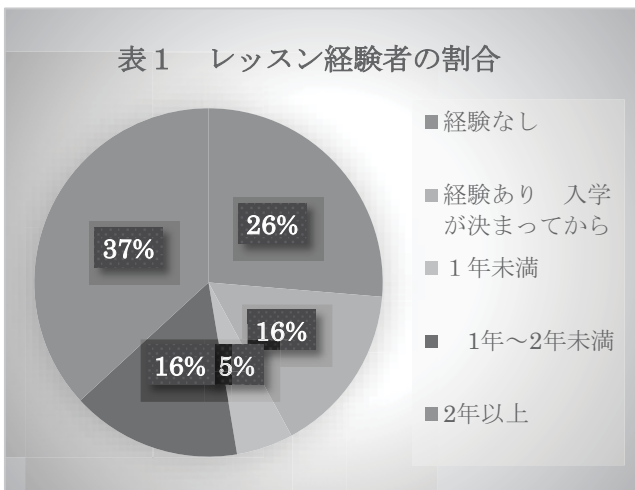
また、個人レッスンの経験者であっても、その緊張が無い訳ではなかった。養成校のカリキュラム内で、演習授業として学ぶこの授業は、職能としての技術、或いは保育技能の一つとしてのピアノ実技、弾き歌い技術を学ぶ場である。それまでの自分のやってきたピアノレッスンとは、必要とされている意識、知識、技術が異なっていることに気づいた時、経験者の学生も緊張が強まることが多かった。

皆で出来れば良いのではなく、一人ひとり個性も経験も全く違う学生に、限られた授業数、時間の中で、如何に現場で必要と考えられるピアノ演奏技術、弾き歌い技術を身に着けさせられるか。この目に見えない緊張や壁を、どのように緩和することができるか。

学生のみに変化を求めるのではなく、学生の現状を受け入れながら、教員がどう働きかけたら良いか授業記録を基に考察した。

2、現状

2-1 レッスン経験について



第1回の授業までに、

1度もレッスン経験がない	26%
経験あり 入学が決まってから	16% (注1)
1年未満	5%
1年～2年未満	16%
2年以上	37%

グラフにしてみると、決して経験者が少ないわけではない事に気付いた。中には、11年(年長から高1まで)レッスンに通っていた学生もいた。また、7年近くレッスンに通っていた学生が、楽譜を読むこと(拍子の意味、リズムの理解、音読み)が全くできなかったことには驚いた。

「どのようなレッスンを受けていたのか？」という問いかけに、「当時習っていた先生が、楽譜

に全てフリガナを振ってくれて、それを見て弾いていた。リズムは、先生が弾いてくれたものを聞いて覚えた。弾き方は、先生の手を見て覚えた。」という回答であった。

2-2 経験者のレッスン形態について

表2 経験者のレッスン形態(複数回答有)

個人	個人レッスン	94.11%
	個人宅へ通った。	52.90%
	訪問レッスン	5.80%
	音楽教室(楽器店運営)	47.05%
	定期的に(平均月4回)	82.35%
	都合の良い時に予約をして	11.76%
グループ	集団レッスン	5.88%
	都合の良い時に予約なしで行く	5.88%

圧倒的に個人レッスンの形態が多いことがわかる。ただ、レッスン時間については、30分から45分くらいが多く、決まっていないという学生もいた。(「できるまでレッスンされた。」とは学生の弁である。)

少し気になったのは、グループレッスン(集団で受けるレッスン)についてだった。学生によると、「その教室の開室時間ならば、いつ行っても良い。数台の電子ピアノがあり、好きなところに座って、練習する。時々、先生が見回りに来て、その時に、悪いところを指摘される。解らないところがあったら、その時に質問する。そこに居る時間は、大体45分くらい。」という形態を「ピアノのレッスンに通っている。」と表現していた。

「何か教えて頂いているのか？」という問いかけに「自分が解らないところを聞いて、何回か練習して帰ってくる。」(その場の先生からのアドバイスはほとんどない状況)＝「レッスンに通っている。」この学生は、練習することとレッスンを受けることが、意識の上で分けられていなかった。

養成校で目指している保育技能としてのピアノ

実技、弾き歌いの技術を身に着けるために、決して安くはない月謝を払って通う「ピアノのレッスン」について、大変考えさせられることとなった。

この授業では、経験者が有利であるとよく言われる。また、学生自身、初学者、経験者共にそのような思い込みを持っていた。特に、初学者には「初めから差がついている。」というプレッシャーとなり、経験者には中身の無い自信になってしまっていた。

経験者については、形態はどうであれ、幼少のころからレッスンを受けていたということは、保護者の薦めもあっただろうが、やはり本人が好きだったのだろう。そんな自分の経験に自信を持つことは、決して間違いではない。また、ピアノの先生との人間関係も大切な経験の一つであったと思う。しかし、その自信が邪魔をして、自分はできているという自己満足に終始し、新しいことが学びにくく、練習への怠慢や初学者に対する上から目線の態度につながることも見受けられた。

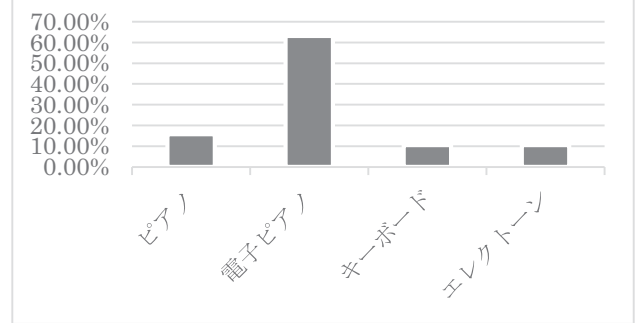
表1、表2とその後の会話から得られた結果から、筆者は、実のない経験は、数にはならないと考え、職能として養成校で身に着ける音楽技術については、全員初学者と考え授業を進めることとした。

ただ経験者には、1対1で受けるレッスン形態の経験がある。また、ピアノのレッスン経験は無くとも、部活動でその他の楽器を経験している学生もいた。自分の経験に基づくプライドについては、配慮が必要で尊重すべきと考えた。

入学したての学生達は、この授業開始時のスタートラインの違いを敏感に感じ取り、また未経験の授業形態であることも拍車をかけ、緊張が倍増するよう感じられた。

そこで、学生一人一人の状況を把握してみると、音楽経験、練習環境(楽器)、将来への目的意識など、当然ながら全く違っていた。

表3 学生の持っている楽器



全体授業ならば、「何のためにこの学校に入学してきたのか」という目的に従わせて進めていくこともできるのではないだろうか。しかし、ピアノの授業は基本的に個人授業である。担当する全ての学生に、伝える基本的な内容は同じであっても、一人一人に寄り添い対応していかなければならないと考えている。

2-3 現在の授業形態

現在、90分授業を45分ずつ2組に分け、前半の学生がレッスンを受けるときには、後半の学生は練習室で練習をする。前半の学生は、個人レッスンを受ける。「個人授業」の形態でありながら、ピアノの前で一人レッスンを受け、後ろには、数人のレッスンを聞いている学生がいる。そのため、全くの個人授業ではない。友だちが聞いているという緊張感がある。

しかし、将来的には人前で弾くこと、歌うことによって何かを伝えていくことが目的なのだから、この緊張は良い訓練になる。その緊張を、ただ嫌がるのではなく、どうしたら受け入れて、学びやすくなるのだろうか。

3、「ホスピタリティ」について

ここで、日本語の直訳だと「おもてなし」となる「ホスピタリティ」(hospitality,英)について説明する。

接客用語として、よく使われる言葉であるが、語源はラテン語の「hospes」(客人の保護者)とい

う意味から派生し、のちに「hospitale」(病院)、「hotel」(ホテル)へと繋がる。

直訳は「おもてなし」だが、ここに含まれる意味は、授業内で教員が学生を「もてなす」という意味ではない。

よく耳にする「サービス」(service,英)との違いを考えてみると、「サービス」(service,英)の直訳は「奉仕」で、語源はラテン語の「sevus」(奴隷)から来ている。これが英語で「servant」(召使)、「service」となる。

「ホスピタリティ」と「サービス」の対比から、その違いを見る。

表4 ホスピタリティとサービスの違い

	ホスピタリティ (hospitality)	サービス (service)
関係	横、前後	縦、上下
立場	パートナー、共利共生	主人と召使、やってあげる側とやってもらう側
存在	共利共存	一方が一方のために在る
目的	プロセス、導かれる結果	結果のみ
スキル	精神性、倫理観、手法の多様化	効率化、マニュアル化

「サービス」は縦の関係(立場による上下関係)で成り立つ。その目的は、今すぐに相手(主人)を精神的物理的に快適にすること。必要なスキルは、主人を快適にするためのマニュアルとその作業の効率化である。

それに対し、「ホスピタリティ」は横の関係である。その場において、目的や立場に違いがあっても、一方的な関係ではなく、共利共生共存の関係を指す。そこには、精神性やそれに伴う倫理観が含まれ、その手段は一つの事柄に対し様々な方向から働きかける多様性が必要と考える。

4、授業内での留意点

授業内で、学生に対しホスピタリティの考え方

をどう活かしたか。

より具体的な方法として、

a.よく観察する

レッスン室に入ってきたところから、学生をよく観察し、健康状態、精神状況、人間関係、表情など推察する。そして、状況を把握したのち、かける言葉を工夫する。

b.教員自身も学生から観察されていることを自覚する。

教員の表情、言葉、言葉を発するときの表情、学生の演奏を聴いているときの様子など。

c.見せる事

弾いて見せる。学生自身の演奏を撮って見せて聴かせる。一緒に弾く。動画、スマホなどのメディアを利用し、比較と検討、また客観性を持ってもらおうと心がけた。

d.共通の話題を持つ

決して迎合することではないが、否定することなく、共通の話題から見方の違いを話し導入として使う。

e.大げさに表現する

褒める、喜ぶなど、より確実に伝えるためにいつもよりも大げさに表現する。否定や拒絶の場合は、どのような言葉を選ぶと、相手を傷つけずに状況や気持ちを伝えることができるか、常に考えアンテナを高くしておく。

f.結果だけでなく、その結果を導いたプロセスを大事にし、継続的な自己否定をさせないようにする。その上で、次に備えた指導をする。

より良いプロセスのためには、練習の仕方をより具体的に伝え、間違っただけでなく、なぜ間違っただけでなく、なぜ間違っただけでなく、弾き直しをしてはいけないのか、それをしてしまったときにはどうしたらよいのかを伝える。

g.教員が授業に際し、常に安定した精神状態を保つ

授業初めの教員の状態は、常に安定していて、学生が少しでも不安を感じないで授業が受けられ

るように心がける。教員の顔色や都合を伺うようなことはあってはならない。

5、結論として

上記のことを心掛けて学生に相對しても、学生の緊張が解け、無くなったわけではない。手が震え、涙が出たりすることはあった。そして、技術的には、個人差は大きいと感じられた。

ただ、大きな変化として、学生の多くが「緊張を受け入れたこと。」「人前で弾く自覚が芽生えたこと。」「どうせ弾けない。という自己否定が軽減したこと。」「この3点が挙げられる。

そして、「練習すれば何とかなる。」という意見もあった。

自己否定が減少することで、その時期は各々であったが、初学者、経験者ともに練習に向かう姿勢に変化が現れた。学生の中には、毎回一生懸命練習してきているのだが、ピアノの前に来ると手が震え、鍵盤の上に指が収まらない位緊張する者もいた。その学生が、最後の授業の後、少し残り、「全く弾けなかった自分が、こんな曲まで弾けるようになって、本当にうれしい。先生、たくさん練習しました。指の震えが前より少なくなりました。」と言ってくれた時には、素直にうれしく思えた。

全ての学生とでは無いにしろ、学生と教員の間で馴れ合いではない信頼と安心感が生まれたように感じられた。

6、終わりに

なぜ、養成校では「ピアノ」なのか。

正直言って、初学者が2年間で巧みに楽譜を読み、初見が利き、伴奏が付けられ、弾きながら歌い、子どもたちにとって初めての曲を教える技術を身に着けるのは、至難の業ではないだろうか。

このようなことを書くと逆賊のような教員と思われてしまうかもしれない。

しかし、筆者にとっては大きな疑問だった。

学生たちのレッスンをし、幼稚園の現場に筆者自身が立ちながら、「ピアノのレッスン」をどのように行っていくかと同時に、その授業の存在意義を考えていた。それこそ、筆者自身の養成校内での存在を否定してしまうような思いに囚われたこともあった。

しかし、茨城県境杉の子幼稚園の寺島雅子副園長の、「幼稚園で、先生がピアノを上手に弾いてくれると、子どもたちが歌を大好きになるの。ピアノだけじゃなくて、いろんな音に対しても敏感になる。音を聴こうとするようになるのよ。お辞儀の和音のように音を聴いて反応するようになる。逆に間違っただけの先生のクラスは、どうもクラスそのものがまとまらない。あと、みんなで何かをする時に(卒園式やお誕生会を指す)、ピアノは音も大きいし安定している(音程と音量)から。」という言葉ヒントに考えていくと、「ピアノが弾けることが全てではないが、重要な保育ツール。」である事がわかる。そして、それを如何にして学生に伝えるか。最終的には、筆者自身も、いずれ現場に立つ学生たちも、「ピアノを使って何を伝えるか。」そのために必要なカリキュラムなのだ再認識した。

また、筆者自身も含め教員は、相對する相手が自分よりも年少であることが多い。当然、経験も知識も少ない。そこに、「学校」という枠に守られ、つい自分の能力が現実のものよりも高いと誤解しやすくなる。

授業は、教員が一方的に自分の知識や技術を伝え、それに応えられない原因が学生にあると決めつけ「レベルが低い」「この子はこれ位しかできないから。」とするのではなく、できうる限り、どうしても理解が進むか、弾けるようになるか、それぞれの立場で共に考えていく場と考えるようになった。

今回の筆者自身の学びの中で、教員同士の関係についても考えることが多々あった。

立場や役割に違いはあっても、学生の前では同じ「先生」である。教員同士がコミュニケーションをとらず、必要な情報を発信すべき立場の人間がその仕事をしなかったとき、それは「いじめ」になると考える。意識のない公私混同が常習化する。最大の被害者は学生ではないだろうか。

数名の教員で担当することの多いピアノ実技、弾き歌い、それ以外の事柄についても、個人だけで授業を組み立てるのではなく、FD活動を行うこと、また他の教科との連携も含め、非常に大切であると考えている。

教員同士にこそ、ホスピタリティの精神は必要なかもしれないと思えた。

最後に、「先生というのは、生徒を見る目で、自分自身も見なければいけません。常に自分の持っている物(知識や経験)を確かめながら、専門以外のことも学びなさい。」80歳を超えて辞書を引きながら英語の指導法を研究していた岩澤好治(1905-1987)の言葉を添えて結びとしたい。

<参考資料>

倫理綱領 名古屋市立大学教員倫理綱領 名古屋市立大学 HP より

倫理綱領 創価大学 創価大学 HP より
大学教員に求められる教育指導能力 (社団法人私立大学情報教育協会) 井畑正臣著 文部科学省 HP より

<参考文献>

ディズニーのホスピタリティ 小松田勝 長崎出版
リッツカールトンの究極のホスピタリティ 長崎出版
保育者養成校のピアノ初心者に対する指導について—ピアノ特補の試み— 小松洋子

聖徳大学幼児教育専門学校研究紀要 第5号
ホスピタリティの起源 中川伸子

神戸女子短期大学紀要 論集 56巻
分かり易く覚え易い中学生の英語 岩沢好治/永瀬武 東京学英社
弾き歌いに関する一考察 鈴木由美子 千葉敬愛短期大学紀要